（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員の資質向上のための研修プログラム開発事業

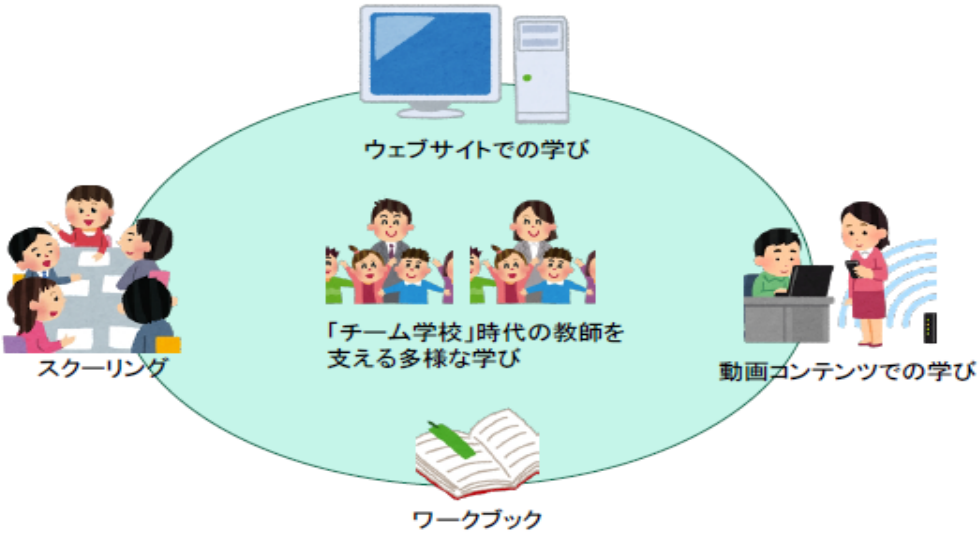
報　　告　　書

プログラム名	「チーム学校」時代における、アクティブラーニングを用いた「リスクマネジメント研修」講師養成プログラムの開発
プログラムの特徴	本プログラム開発では、管理職および中堅教員（教員歴 10 年～20 年程度）を対象とし、校内研修等で「リスクマネジメント」を学ぶ際に、講師を務めることができる研修プログラムの開発・構築を目的とする。 従来型の講義、ワークショップ等の研修形態に加えて、スマートフォンやパソコンで見ることができる動画コンテンツ、ワークブック型の必携書や概説書を併用することで、研修受講後も継続的に、日々の教育活動を省察し、自らの資質・能力を向上させていくことができる。

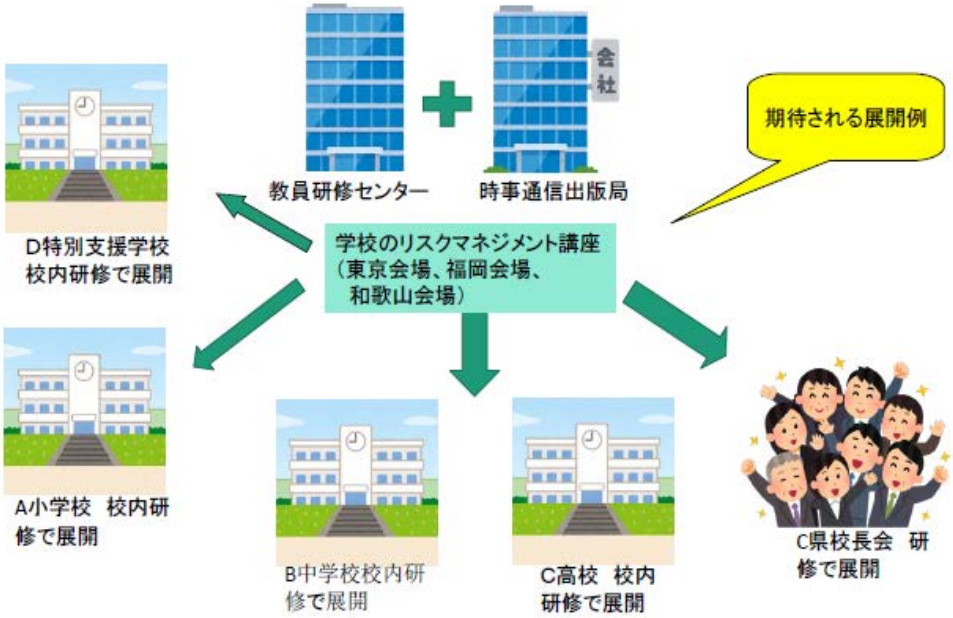
平成　29 年　3 月

機関名　　㈱時事通信出版局

プログラムの全体概要



リスクマネジメント研修の全体像



Ⅰ　開発の目的・方法・組織

１．開発目的

2000 年代以降、都市部を中心として、退職教員の増加に伴い教員採用が大型化し、20 代の教員が増える中、学校を支える 30、40 代の中堅層が薄く、校内における年齢の不均衡から、経験豊富な 50 代の先輩教員から 20 代の若手教員への円滑な知識・技能の継承が難しくなっている。

一方、学校教育を取り巻く環境の変化は激しく、地域の教育力低下や家庭環境の多様化などから、特に、経験が浅い若手教員が直面する環境には厳しいものがある。

近年、「学校事故」への関心が高まり、最近も運動会における「組み体操」「騎馬戦」等の実施の是非が話題となったことは記憶に新しい。こうした学校行事で起こる事故は、実際に児童生徒に重篤な障害が残るケガにつながることもあり、教育活動として適切な配慮が求められる。独立行政法人日本スポーツ振興センターがまとめた資料によれば、小学校だけでも、学校の管理下における死亡事故は運動会のみならず、給食中（特別活動：給食指導）、休憩時間中、下校中等にも発生しており、運動会以外にも、学校内外に未然に防ぐべき危険が多く潜んでいることが分かる（『学校の管理下の災害〔平成 26 年版〕』）。

経験が浅い若手教師に対して、従来であれば、丁寧に校内でオン・ザ・ジョブ・トレーニングの形で継承されていたはずのさまざまな知識・経験が、教員全般にかかる業務の繁忙化・多忙感などにより、十分に取り組まれておらず、「リスクマネジメント」については、教員養成段階でも十分に学ぶ機会が保障されていない。学校内外に潜む危険に鑑みると、各学校において、効果的な校内研修を行うことが求められている。

本プログラム開発では、学校事故の判例等を用いながら、実際に起きた事故を基に未然に事故を回避する「リスクマネジメント」を学ぶための教材開発と、校内研修で若手教員を指導する管理職や中堅教師向けの指導方法および教材の開発・構築を行う。

事件・事故を未然に防ぐための「リスクマネジメント」の考え方は、不幸にも、事故が起きてしまった後の取り組みをどうするかといった「クライシスマネジメント」とは異なり、日常に潜むリスクをいかにして察知し回避するかという感覚を養うことが主たる目的となる。これは担任教員をはじめ、日々、子供たちと直接接する教職員すべてに求められる資質・能力である。

本プログラムでは、学校のリスクマネジメント概論を学んだ上で、アクティブラーニングの手法を活用したワークショップや事例研究の演習などで、より実践的な内容を学ぶ。また、学んだ内容を自校で展開できるように、動画コンテンツや研修ワークブック、概説書を作成し、研修後に、課題は各学校ごとに異なるため、自校では何に気を付けて、充実した学校運営・活動ができるかを、教員自らの課題として考えることができるプログラムを開発・構築する。

「チーム学校」を目指し、先輩教員が後輩教員の面倒を見る「メンター方式」も意識して取り入れながら、志ある若手教員が入職後の怒涛の毎日の中で挫折することなく、児童生徒や保護者、地域の方々から慕われ、信頼されるための基盤となる「リスクマネジメント」能力を身につけることができる研修プログラムの開発・構築を目的とする。

２．開発の方法

平成２７年度に「時事通信 教育プレミアムセミナー」として、全国の管理職や中堅教員を対象に最新教育事情の講義（講師：大槻達也・国立教育政策研究所長〈当時〉、貝ノ瀬滋：教育再生実行会議有識者委員〈当時〉等）およびコンプライアンスについての講義・ワークショップ（講師：坂田仰・日本女子大学教授）を行ったところ、ぜひ継続して取り組んでもらいたいという評価を参加者よりいただいた。その中でも、特にリスクマネジメントについてのワークショップの満足度および次年度も継続して取り組んでもらいたいという期待が高かった。

平成２８年度は、坂田仰教授が全国各地の教育委員会や校長会、教頭会等で行ってきた講義や、判例等の分析を元に演習用に開発した「設題」を用いたワークショップの取り組みを基盤として、学校における「リスクマネジメント」の感覚を養うワークブックと概説書の制作、動画コンテンツの制作に取り組んだ。

また、カリキュラム開発・指導、研修講師を務めた河内祥子・福岡教育大学准教授が小学校教師の「リスクマネジメント」感覚を養うために、イラストを用いた危険箇所チェックの講義を行っており、その成果を基に、学校内外における危険場面を追加し、ワークブックに収録した。実際の研修会場では、時間の関係から、運動会のイラストを用いて「リスクマネジメント」の感覚を養った。

研修に参加した教員の反応などを踏まえて、講義内容を改めて収録した動画コンテンツを制作した。これによって、校内研修等を行う際に、研修に参加していない教師もスムーズに「リスクマネジメント」を学べることとなる。

ワークブックと併用することで､より効果的な校内研修等を実施することができることとなった。

３．開発組織

カリキュラム開発・指導／評価、研修講座講師

坂田　仰・日本女子大学教授

河内祥子・福岡教育大学准教授

中西　茂・玉川大学教授

カリキュラム開発、教材開発、動画コンテンツ開発

島内真人・時事通信社『内外教育』編集長

佐藤明彦・時事通信出版局『教員養成セミナー』編集長

坂本建一郎・時事通信出版局編集委員

研修講師

戸田恵蔵・弁護士（銀座第一法律事務所）

小美野達之・弁護士（ほなみ法律事務所）

Ⅱ　開発の実際とその成果

１．学校のリスクマネジメント講座

〇研修の背景とねらい

学校教育に対する信頼と期待が、学校事故等をきっかけとして不信と非難に変わるようになって久しい。従前であれば「学校の判断なら」「教師がそう考えるのであれば」と信頼されていたことが通用しなくなっている。社会のありようが変わり、価値観が多様化する中で、「愛と情熱」だけで日々の教育を実践することが難しくなってきている。そうした中で、教育行為を法的な観点から規定する「法化社会」も進行している。

こうした学校が置かれている状況を的確に理解し、教育活動に熱心に取り組む先生が委縮することなく、また同時に、法令順守や「リスクマネジメント」の必要性を理解し、適切に実践することができる力を教職員が身につけることが重要である。

都市部を中心として若手教員が増加し、十分な研修を受ける機会のないまま、困難な状況に直面している。教育活動に潜在的に含まれる危険について校内でオン・ザ・ジョブ・トレーニングを受ける機会も少なく、教員養成段階で「リスクマネジメント」を十分に学んできているわけではない。

こうした状況をふまえ、校内研修で「リスクマネジメント」を扱うことができる講師養成プログラムを開発することに意義があると考えた。

講義で学校の「リスクマネジメント」の概要を学び、その上で、グループに分かれて、イラストを用いた危険個所確認、その後に、実際の学校事故の判例等から構成した「設題」を基に議論を行い、成果を発表するという形式で、生きた知識としての学校の「リスクマネジメント」を学ぶことをねらいとした。また研修会場で学んだことを自校に持ち帰り、校内研修等で実施することもねらいとしている。

平成２８年度は東京会場、福岡会場、和歌山会場の３ヵ所で実施した。以下、各会場の概要と評価について記す。

【東京会場】

対象：小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の管理職、中堅教師、教育委員会等職員

人数：４４名　管理職が７割、中堅職員が３割。※学校種は下記の通り

（小学校：１４名
中学校：３名
高等学校：８名
特別支援学校：１名
教育委員会、センター等：１４名
私立中高一貫校：４名）

日時：２０１６年 １０月２２日（土）１３：００～１７：００

会場：時事通信ビル内特設会場（東京都中央区銀座５－１５－８）

講師：坂田仰・日本女子大学教授
河内祥子・福岡教育大学准教授

戸田恵蔵・弁護士（銀座第一法律事務所）

【福岡会場】

対象：小学校の管理職、中堅教師　<u>※福岡市教育委員会が後援</u>

人数：２８名　管理職が５割、中堅職員等が５割。※学校種は下記の通り

（幼稚園：１名

小学校：２４名

特別支援学校：１名

次年度福岡市教員採用予定の学生：２名）

日時：２０１６年 １１月２２日（火）１８：３０～２０：３０

会場：ＴＫＰ博多駅前シティセンター会議室（福岡市博多区博多駅前３－２－１）

講師：坂田仰・日本女子大学教授

河内祥子・福岡教育大学准教授

【和歌山会場】

対象：小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の管理職、中堅教師、教育委員会等職員

人数：７０名　管理職が５割、中堅職員が５割。※学校種は下記の通り

（小学校：４２名

中学校：７名

高等学校：１０名

特別支援学校：５名

教育委員会、センター等：６名）

日時：２０１６年 １２月２３日（金）１３：３０～１７：００

会場：和歌山県ＪＡビル　和ホールＡ（和歌山市美園町５－１－１）

講師：坂田仰・日本女子大学教授

河内祥子・福岡教育大学准教授

小美野達之・弁護士（ほなみ法律事務所）

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数

講義で全体像を理解した上で､個別具体的な事例を個人およびグループで検討する方式を取った。具体的には以下の手順で行った。

学校のリスクマネジメントの考え方について、坂田教授の概論を講義で学ぶ（９０分）。

その後、リスクマネジメントの考え方を実践に移すために、「イラストで探す危険個所」（別添資料１）に取り組み、その後、実際の学校事故や判例等から構成した「設題」（別添資料２）をグループに分かれて、どういう対応が考えられるかについて議論を通じて検討する（９０分）。

グループごとに議論の成果を発表する（１５分）。

最後に、坂田教授から発表内容に対するコメントを行い、議論をまとめる（１５分）。

○実施上の留意事項

一般的な研修においては、同地域、同学校種、同じキャリアステージの受講生が学ぶ形態が多いが、実際の学校では、職制も経験年数もさまざまな教員が力を合わせて学校を支えている。

本研修では、予定調和となりがちな発想や議論を避け、学びを深めるために、異なる地域、異なる学校種、異なるキャリアステージの教員をグループ分けして、普段、周りから聞く意見とは異なる考えを基に、新鮮な気持ちで考える機会を持てるようにした。

また、研修冒頭に概説として、現在の学校が置かれている状況や、学校事故が判例としてどのように扱われているかを最新の情勢を基に整理し、なぜ学校の「リスクマネジメント」が求められるのかを確認した上で、「イラストで学ぶ危険個所」、実際の学校事故や判例等から構成した「設題」を基に、個別具体的な事例について学んだ。

また受け身的に受講するだけで終わったり、せっかくの議論の成果が宙に浮いたまま終わったりすることがないように、各グループが議論の成果を模造紙にまとめて、他の受講者に対して発表を行った（後掲の各会場資料写真参照）。研修において、ただ受講するだけ、ただ体験するだけ、ではなく、他のグループの成果からも学べるように配慮した。

○研修の評価方法、評価結果

研修終了後、各会場でアンケートを行った。東京会場と福岡会場についての回答結果は以下の通りである。

【東京会場】回収数は３６通（回収率８１％）

１．日程について　　□ちょうどよい　　３４人

　　□別日程の方がよい　　２人

　　（丸１日、ないしは２日、もっと多く時間をかけてもよい）

　　（午前講義、午後演習くらいの時間があってもよかった）

→否定的な内容ではなく、むしろ日程を長く取ってほしいという要望であった。

２．研修内容について

講義	□役に立った	３４人
	□普通	０人
	□役に立たなかった	０人
	※無記入	２人
ワークショップ	□役に立った	３３人
	□普通	１人
	□役に立たなかった	０人
	※無記入	２人

【福岡会場】回収数は２１通（回収率７５％）

１．日程について　　□ちょうどよい　　１８人

□別日程の方がよい　　３人

（休日にじっくりと取り組みたい、同意見１通）

（平日なので、開始時間をもう少し遅くしてもらいたい）

→否定的な内容ではなく、むしろ日程を長く取ってほしいという要望であった。

２．研修内容について

講義　　□役に立った　　２０人

□普通　　０人

□役に立たなかった　　０人

※無記入　　１人

ワークショップ　　□役に立った　　１９人

□普通　　２人

□役に立たなかった　　０人

３．研修の感想・自由記述（抜粋）

【東京会場】

・講演を基調にして、ワークショップにおいてグループワークを実施する形式は理想的だと感じました。

・坂田先生の講義は、現実事例の分析に基づき、実践的内容であった。現場の役に立つ研修でした。特に、「危機管理発生時マニュアル」の読み合わせは、即実行します。

・具体的な事例をもとに、論点を簡潔にした講演、演習で分かりやすかった。スクールコンプライアンスという理念がよく分かったが、どうしても、スクールとコンプライアンスのバランスがぶれそうなので、また別な機会にお話を聞きたいと思った。

・市教委として、学校として、所属職員のモデルとなるような研修構成でした。活用させていただきます。

・様々な校種、役職の方と交流でき、とても刺激になった。自己を見つめ、振り返る貴重な時間となった。

・坂田先生の事例解説は具体的で分かりやすかった。様々な事例を今後の教訓としたい。ワークショップでは、様々な校種・地域の先生と協議することができ、貴重な情報を得ることができ、研修を深めることにつながった。

・危機管理の視点が「なるほど」と思わされた。少しずつ、自分に日々、その視点で学校の中を見ていく習慣を身につけていきたい。
・地域、校種、立場を越えた者同士が、一つのテーマで話し合うのは新鮮でした。
・講義の内容がとても興味深く、ためになりました。本校の教職員に伝えていかなくてはならないことが見えてきました。想像した時にどうなるか、起きる前にできることを確認していきたいと思いました。また、そこに気づく感性を磨いていきたいと思います。ワークショップも様々な立場の人がいて、参考になりました。ありがとうございました。また機会があれば、参加させていただきたいです。
・リスクマネジメントに関する多くの知見をもらえた有効な研修会でした。ワークショップでは、小中高と幅広い校種の方から「視野が広がる意見」が多く出され、本当に多くの「気づき」を得ることができました。
・学校現場の実態を理解した上で、どのように危機管理していくかという視点で、本当に研修になりました。また、応援されている感じがあり、とても心強く、嬉しく思いました。ありがとうございました。
・グループ編成が他自治体、職種の人と交流できたのが、たいへんよかった。
・資料が丁寧なつくりで、念入りに仕上げられていました。坂田先生の理路整然としたお話をさらに深く追求してまとめるのに役立てると思います。
・ワークショップで、さまざまな地域の方と交流でき、良いと思いました。付箋などがあると、さらにまとめやすいかなと思いました。

【福岡会場】
・大先輩の先生方の話を聞くことができ、事案に対する見方がとても良い方向に変わりました。
・大変、内容の深い研修でした。危機管理の大切さを再認識させられました。有難うございました。
・他校の管理職の先生方と学ぶことができ、大変ありがたい時間でした。
・いろいろなケースのお話があったかと思うと、遅れて参加し、残念でした。
・具体的な事例に基づいて、法律の根拠も交えたお話で、たいへん身近に感じ、もっと「マニュアル」をしっかり読まねばと身が引き締まる思いがいたしました。自分自身がもっと事例や法律を勉強したいです。
・とても分かりやすかったです。なんとなく理解していたけれど、やはりしっかりと理解できていなかったことに気づくことができました。学校に求められていることをしっかりと考えていきたいと思います。ありがとうございました。
・今後、起こってほしくないですが、「ゼロリスク」はないので練習できておいてよかったです。危機感をさらに持つことが必要と感じました。
・実際のケーススタディもできてためになりました。現場の話を聞けてよかったです。
・学校でもこれくらい時間をとって、「自分ごと」として考えあう機会をつくりたいと思いました。
・イラストでの研修、ワークショップでの研修はとても熱がこもっていて、役に立ちました。
・定期的にこのような研修を受けたいです。とっても勉強になりました。手で回すタイプのラジオを即、購入します！！　ありがとうございました。

・他学校の先生方と学校で起こりうる問題をお話させていただき、私だけでは見えてこなかった、学校内での連携や保護者とのかかわり方などを考え、知ることができました。管理職の先生方とお話をする機会は、働いている間も少ないので、とても貴重な時間でした。有難うございました。
・裁判事例と日常の学校の課題を結びつけてのリスク・マネジメント・セミナーであったので、大変有意義であった。
・本研修内容のみでなく、これを生かして、学校で研修を行うためのエッセンスも豊富にあり役に立った。これを生かして学校で研修を行いたい。
・大変面白かったです。これからの学校現場に必要なことばかりでした。
・具体的な事例に基づいて講義やワークショップが行われたので、とてもわかりやすく、自分自身のこととして考えることができました。グループで協議できたので、リスク・マネジメントに対する見方や教え方を深めることができました。
・とてもよい研修会でした。来年度、このような演習方式の会を本校でも開催したいです。

【東京会場の様子】

坂田教授による講義

河内准教授によるイラスト危険個所講義

受講者による発表

受講者による「設題」の検討

受講者による「設題」の検討　　同

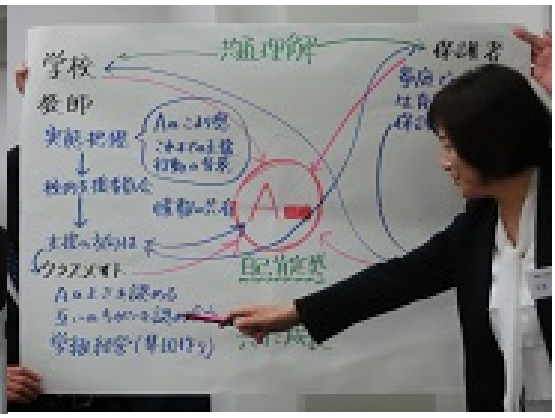
「設題」の発表　　同

【福岡会場の様子】

受付（次年度から教壇に立つ学生２名）　　坂田教授による講義

河内准教授によるイラストチェック　　同

受講者による「設題」の検討　　同



「設題」の発表　　同

【和歌山会場の様子を報じた、毎日新聞の記事　２０１６年１２月２４日朝刊】

工が教えます

タグラグビーフットボール大会トボール協会、全国高体連な年10月から月1回、和歌山市童向けのタグラグビー教室をの一環で、花園出場が決まっい」と、子供たちに好評だ。【石川裕士】

の施設で地域住民やPTAらがさまざまな教室を開く「子どもセンター事業」の一つ。スポーツ教室を新たに開設したい和歌浦小P

さを子供たちに広めたい山下弘晃監督(33)ら和歌山工側の思いが一致して実現した。

同小の前田いさ教頭は「習い事がない人は土曜を漫然と家で過ごしがち。子供たちが外で体を動かすきっかけになってほしい」と期待する。参加した5年の原田大輝さん(11)は「たくさんトライできた。ボールがどこに転がるかわからな

行する恒例の「クリスマス電車」内で23日、サンタクロースや赤鼻のトナカイに扮した駅員が子供たちにクリスマスプレゼントを贈った。

同電車は11月25日～今月25日に運行するが、プレゼントをもらえるのはこの日だけ。今年は454人の応募があり、抽選で150人を選

んだ。当選した親子連れらは「たま電車」「うめ星電車」の上下計6便に分乗し、約30分間のクリスマス電車の旅を楽しんだ。

車内では、地元のきしがわ少年少女合唱団が「あわてんぼうのサンタクロース」などを合唱。車内のクリスマスムードを盛り上げていた。乗車した保田悠那ちゃん(5)＝和歌山市＝はプレゼントの袋を開け、「たくさん入っていてうれしい。まんじゅうはママにあげるけど、イチゴミルク味のあめは私が食べる」と喜んでいた。【山本芳博】

うう子供たち＝和歌山市で

学校事故 防ぎ方考える

リスクマネジメント 教職員ら70人

和歌山

学校での事故やトラブルを未然に防ぐ最善の方法を考える教職員向けのリスクマネジメント講座が23日、和歌山市美園町5の県JAビルであった。日本女子大の坂田仰教授（公教育制度論）が「学校事故とスクール・コンプライアンス」と題して講演し、小中学校や高校、特別支援学校の教職員ら約70人がワークショップに参加した。坂田教授は学校に関わる裁判の事例について、小学校は授業中、中学校はいじめ、高校は部活動がそれぞれ割合が最も多いとのデータを示し、過去の判例を紹介。「かつて信頼や情熱で成り立っていた教職員と保護者・子供の関係が、現在は極利・義務から捉えられている」と述べた。

その後、参加者はグループごとに、運動会のイラストを用いて危険箇所を確認したり、児童がいじめられているとの設定で対応を話し合ったりして結果を発表した。【倉沢仁志】

講演した坂田仰教授＝和歌山市美園町5の県JAビルで

学生20人 献血呼び掛け

クリスマスキャンペーン

和歌山

献血が減る冬場に協力を呼び掛ける「全国学生クリスマス献血キャンペーン」が23日、和歌山市松江のガーデンパーク和歌山などであった。赤いサンタの帽子をかぶった近畿大生物理工学部（紀の川市）の学生ら約20人が、「献血やってます」などと書いた自作のプラカードを掲げ、買い物客らに献血への協力を訴え

献血を呼びかける学生たち＝和歌山市松江のガーデンパーク和歌山で

能となる16歳から20代の若者の献血者数が大きく落ち込んでいる。このため、県内の大学生らでつくる「県学生献血推進協議会」は、若い世代に献血に興味を持ってもらおうと、毎年12月にキャンペーンを実施している。【最上和喜】

行政ファイル

◇有田川町の保育所でノロウイルス集団感

事件・事故

◆勝浦港で男性が水死

23日午前4時45分ごろ、那智勝浦町築地7の勝浦港で、同町勝浦の浜口文生さん(57)がうつぶせで海面に浮いているのを釣り人が見つけて引き上げたが、既に死亡していた。水死とみられる。新宮署によると、現場近くで釣り道具を積んだ浜口さんの車が見つかっている。

和歌山放送

ラジオガイド

「第31回wbsラジ

で、2～6歳の園児15人と20代女性職員2人がノロウイルスに集団感染したと発表した。既に全員が快方に向かっているという。

例のチャリンペーン。近鉄百貨店ら公開生放ト。斉藤由握手やドが登場。和・新宮でチオークショ内は桂枝曾美アナ。詳山放送HP

きょうはこんな日

	紫外線	洗濯	布団干し
和歌山	1 弱い	3 乾きやすい	2 干しても可
田辺	2 やや強い	3 乾きやすい	2 干しても可
潮岬	2 やや強い	3 乾きやすい	2 干しても可

きょうの行楽地

あすのこよみ

12月25日（日）
旧暦11月27日
（先勝）中潮
月齢25.6

月出 3:08月入14:18
日出 7:03日入16:56

【和歌山港】
満潮 4:36 15:33
干潮 9:47 22:36

【中本港】
満潮 4:01 15:04

各項目は4段階で表示。項目は季節で

総本山
根来寺 指定

一級技能士
お墓ディレクター 一級
日本石材産業協会加盟店

井上石材店

歳末たすけ

送金は郵
970-9
1）で毎日
事業団へ。
付金は税制
があります。
5000
原名750
山市、山田
和歌山市

○ウェブサイト・動画コンテンツによる学びのフォローアップ

本研究開発プログラムにおいては、参加者が、各会場において学んだことを自校の校内研修等において、講師役として展開できるスキルを身に付けることを目的としている。

そのため、会場における講義内容や、イラストを用いた学びを復習できるよう、特設のウェブサイト（http://www.school-risk-management.com/）を構築した。

ウェブサイトのデザイン

参加者は上記サイトにアクセスし、坂田教授、河内准教授による講義を学ぶことが可能となる。また、会場にて使用したワークブックを用いて、校内研修を展開することができる。

さらに、研究成果を活用した書籍、ワークブックを製作した。これらを用いて、学校のリスクマネジメントの感覚を学ぶことが可能となる。

〇研修実施上の課題

■効果的な日時の設定

管理職、中堅教師は日々多忙で、校長会や校務分掌の会議や日々の業務に追われているため、研修に参加したいと考えても、なかなか時間を確保できないということがある。福岡会場、和歌山会場では、それぞれ、市教委、市校長会のご協力をいただいたが、事前の打ち合わせで、なかなかその地域の先生方がまとまって集まることができる日時が限定され、設定することが難しいということがあった。今回の研究開発プログラムのように、校外に出て研修を行う場合、適切な日時の設定が参加者の増減を規定する要素であることが分かった。なるべく早い時期から（できれば前年度から）、学校の「リスクマネジメント」の重要性を理解してもらった上で、研修の日時を設定することが肝要である。

特に、福岡会場では、他の２会場とは異なる、平日夜間に設定をしたところ、当日、校内で突発的な事態への対応が必要となり、３名ほど同一学校からの参加がキャンセルになったということがあった。これについては、研修ワークブックや学校のリスクマネジメントに関する概説書、さらには、ウェブサイトや動画コンテンツの学びにて、一定程度、カバーすることが可能であると考えられる。

しかし、すでに確認してきたように、受講後アンケートの結果、特に自由記述に現れている実際の講義受講と、ワークショップ参加による主体的、対話的、かつ深い学び（アクティブラーニング）に勝るものはないと思われる。

■演習内容・形態

講義から演習（ワークショップ）という流れは受講者である先生方にとって、問題の全体像を理解し、自校の課題をそこに結び付けながら実際に頭を働かせ、体を動かし、協同的な作業で発表に向けて議論を重ねて時間内に成果をまとめあげるという形が最適であるという評価を多数いただくことができた。

一定の評価をいただけたので、この形をさらに発展させていき、より多くの先生方のお役に立てる研修を開発していきたい。

また、グループ分けについては、普段顔を合わせることの多い先生ではなく、あえて異校種、異学年等で構成したところ、これも好評であった。校内研修や職階別研修とは異なるダイナミズムがここで生まれていることも分かった。

ただし、時間的制約から、すべてのグループが発表をできないこともあった（和歌山会場）。人数を増やすと、なかなかきめ細かい対応は難しくなり、受講者の深い学びや満足度をみたすことが難しくなることが考えられる。

これについては、規模と学習効果の測定なども今後、課題として研究していきたい。

Ⅳ　その他

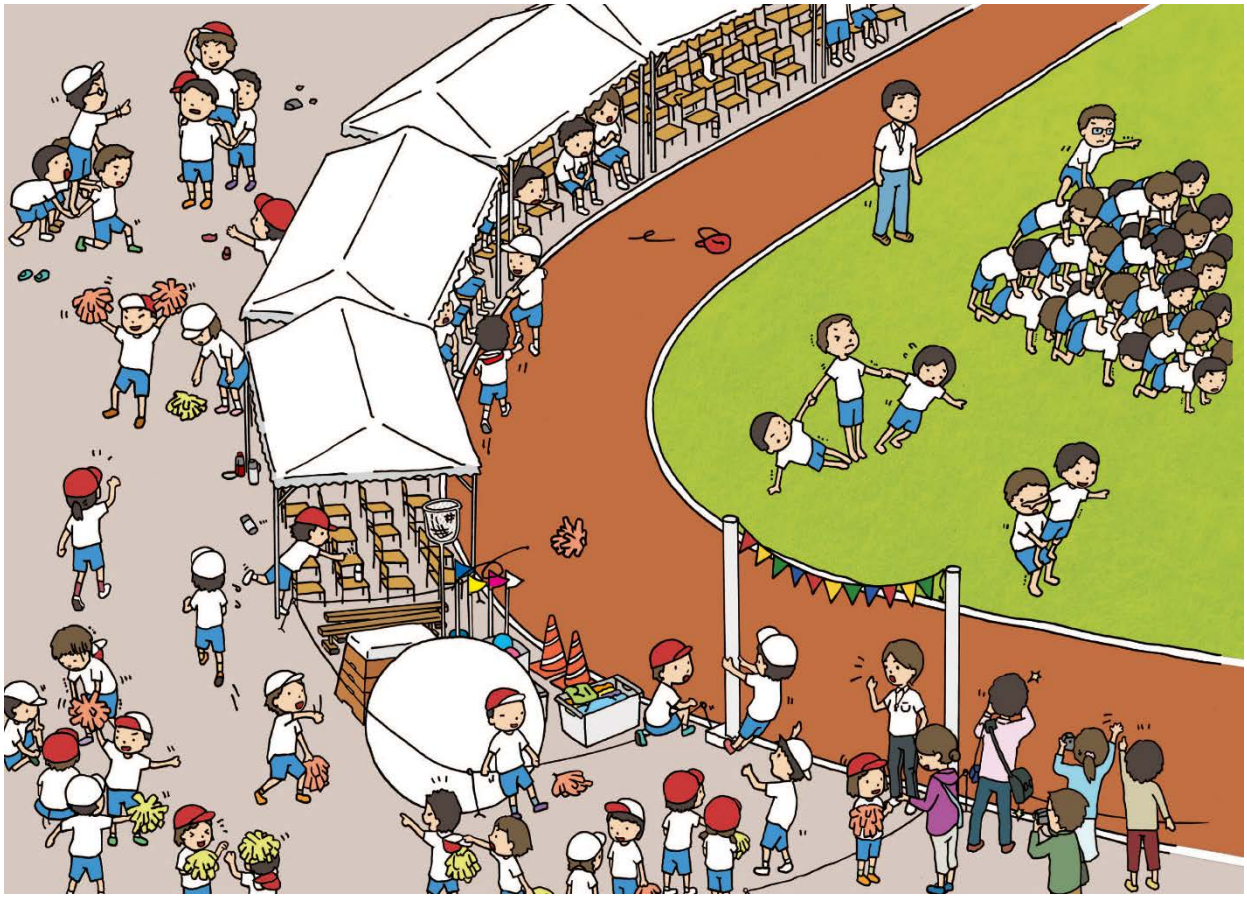
［キーワード］　学校のリスクマネジメント、学校事故、校内研修、コンプライアンス、危機管理

［人数規模］
東京会場　Ｃ４４人
福岡会場　Ｃ２８人
和歌山会場　Ｄ７０人

［研修日数（回数）］
東京会場　Ｂ１回
福岡会場　Ｂ１回
和歌山会場　Ｂ１回

【問い合わせ先】
㈱時事通信出版局
〒104 - 8178　東京都中央区銀座５－１５－８　時事通信ビル４階
TEL 03-5565-2159
担当　坂本　建一郎

別添資料１　イラストでチェックする運動会の危険個所



実際に運動会で起こりがちな危険個所をイラストで起こした。

別添資料２　実際の学校事故や判例等から構成した「設題」

設題5 発達障害を有する児童のいじめ

状況説明文

Aは、B市立C小学校の3年生児童である。発達障害（ADHD）の傾向を有しており、他の子どもをからかったり、ちょっかいを出したりすることが多く、また時には粗暴な振る舞いをすることもあった。そのため、度々、クラスメートがアザ等をつくり、苦情が寄せられ、担任はその都度、Aの保護者と話をしている。しかし、保護者は、Aは親愛の情を示しているだけで、個性として受け止めて欲しいと繰り返すばかりであった。

10月10日、1時間目終了後、教員Dが図書室の前を通りかかったところ、Aが、同じクラスの児童Eをからかっているところを見つけた。Eから、4月以降、いつも同様の行為を受けて迷惑をしているとの訴えを聞いていたDは、Aを制止し、「このようなことをしてはいけない」と注意した。

10月11日、Eの保護者から担任に電話があり、Aの行為はいじめに該当すると思われるので、きちんと対処して欲しい旨の申し出を受けた。保護者によれば、EがAに会うことを嫌い、登校を渋るそぶりを見せているという。

担任教員がEから事情を聞いたところ、Eは、Aの行為に苦痛を感じているとのことであった。そこで、担任教員は、管理職も交え、Aの保護者と話し合いの場を設け、日頃の状況とともに、今回の訴えについて説明した。

これに対し、Aの保護者は、「Aを差別するのか」と激怒し、Aの個性をまわりの生徒が受け容れるのが当然ではないかと主張して譲らない。折しも、障害者差別解消法が施行されたこともあり、C小学校の教員は頭を悩ませている。

問

以下の点について検討せよ。

1. AのEに対する行為は、いじめと認定するべきか。
2. Aの保護者の主張をどのように考えるべきか。
3. 危険な行動を繰り返す、Aに対してどのような方針で指導を行うべきか。